

2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違い

片岡 祥*・園田直子**

The Difference in the Occurrence Mechanism of Two Romantic Control Behaviors

Sho KATAOKA* and Naoko SONODA**

This study investigated the difference between the mechanisms of violent control behavior and restricting control behavior with codependence and separation anxiety toward a romantic partner. The participants were 48 (19 men, 29 women) university students with romantic partners. Analysis found that self-sacrifice of codependency mediated separation anxiety, generating restricting behavior. This tendency was the same with immaturity. Violent behavior did not have that tendency. Violent behavior directly influenced immaturity. The following differences in behavior were found. In those with high self-sacrifice characteristics, there is a tendency to select a restricting behavior with growing separation anxiety in relationships. However, it said that this group does not aim for violent behavior. People with high immature characteristics tend to select control behavior action regardless of the anxiety in the relationship. It is argued that these results are applicable to prevention and education.

key words: control behavior toward romantic partner, co-dependency, separation anxiety toward romantic partner

問 題

恋愛関係の中では様々な問題行動が生じる。中でも、片岡・園田(2014)は様々な行動から恋人の行動を制限しようとする試みを“恋人支配行動”と命名している。彼らによると、この支配行動は暴力行動と束縛行動の2つに分類できることが報告されている。恋人支配行動の種類によってそれぞれの生起の背景が異なることが明らかになれば、予防や教育をより効果の高いものに最適化することが可能となる。

本研究は個人特性と関係性の状態から2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違いを明らかにし、予防や教育のための示唆的な知見を得ることを目的とする。

問題行動の研究領域

恋愛関係の中で生じる様々な問題行動に関する研究は、デートDVの領域を中心として急速に増加し

ている。デートDV研究では、“身体的暴力”、“精神的暴力”、“性的暴力”の3つを扱う場合が多い(内閣府, 2012)。これらに加えて、“社会的暴力”と“金銭的暴力”を含めた5つから問題行動を把握しようとするものもみられる(横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)。すでに海外では研究が進み始めており、大規模なレビューも展開されているもの(Archer, 2000; Lewis & Fremouw, 2001; Straus, 2008)、本邦では多くの場合実態把握に留まっている。本邦の現状にみあう予防や介入を考えるうえで、問題行動の生起メカニズムの検討は重要な課題である。

日本における心理学的な研究では、問題行動のメカニズムや関係性に及ぼす影響を扱うものがみられるもの(赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野, 2011; 深澤・西田・浦, 2003; 榊原, 2011)、必ずしも積極的に議論されてきたわけではない。このことをふま

* 西南学院大学

Department of Human Sciences, Seinan Gakuin University, 6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

** 久留米大学

Kurume University, 67 Asahi-machi, Kurume-shi, Fukuoka 830-0011, Japan

えて、片岡・園田(2014)は問題行動に関する一連の研究を行った。片岡・園田(2014)は、問題行動の中でも恋人の行動を制限する行為を総称して“恋人支配行動”と命名し、デートDVや恋愛関係を測定する既存の複数の尺度を基に、恋人支配行動を測定する尺度の開発を行った。その結果、“暴力的支配行動”と“束縛的支配行動”の2因子がみいだされた。暴力的支配行動はデートDVの3領域、すなわち“身体的暴力”、“精神的暴力”、“性的暴力”と合致する。束縛的支配行動は、社会的暴力の領域と対応する。片岡・園田(2014)の知見から、問題行動は暴力と束縛の2つの領域に大別できるといえる。本研究もこの立場に立ち、議論を進めていく。

恋人支配行動の生起メカニズムと解決されない問題

問題行動の生起には、関係性の要因が影響を及ぼすことが知られている。例えば、強い愛情(寺島・宇井・宮前・竹澤・松井, 2013)、交際期間の長期化(高坂, 2012; 松井, 1993)などである。しかしながら、これらは関係の安定性に寄与する場合もあることから(Hazan & Zeifman, 1994; Sternberg, 1986)、必ずしも恋人支配行動の生起の決定因とはならない。

そこで、片岡・園田(2014)はそれぞれの支配行動のメカニズムを解明するために、関係内で生じるネガティブな動因に着目し、愛着理論(Bowlby, 1969, 1973)の観点から恋人への分離不安を測定する尺度を開発した。そして、先行研究で報告された2つの生起要因(愛情、交際期間)と恋人分離不安の交互作用から、恋人支配行動の生起条件について検討した。その結果、交際期間が短い場合、恋人分離不安が弱いほど暴力的支配行動は多かった。また、交際期間が長い場合、分離不安が強いほど束縛的支配行動は多かった。このように、2つの恋人支配行動は交際期間と不安の強弱の交互作用から、その生起が決定づけられるといえる。

片岡・園田(2014)の研究は、恋愛関係において生じる問題行動の生起メカニズムについて一定の知見を得た。しかしながら、交際期間の長さの違いはあるものの、どちらも分離不安の強さのみが関与していたため、2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違いが明らかではない。2種の行動の違いを解明することは、問題行動の予防や教育を考えるうえで重要である。一般的に、予防や教育は様々な問題行動をひとつくりにして行うことが多いと考えられ

る。もしも問題行動ごとに生起の背景が異なるのであれば、それぞれに対応した対策を講じる方がより効果が高くなる。

そこで、本研究は恋人支配行動の生起メカニズムについて、個人特性として共依存傾向、関係性の状態として恋人分離不安に注目し、2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違いを明らかにすることを目的として検討を行っていく。

本研究でとりあげる個人特性

片岡・園田(2014)の研究は、関係性の要因に焦点をあて恋人支配行動の生起について検討したものである。しかしながら、問題行動の生起に関する先行研究では、自己愛(松並、青野、赤澤、井ノ崎、上野, 2012)や性役割(深澤他, 2003; 上野・松並・青野・赤澤・井ノ崎, 2012)、愛着スタイル(井ノ崎・上野・松並・青野・赤澤, 2012; 相馬・福島・坂口, 2006)、ラブスタイル(赤澤他, 2011)といった個人特性が関与しているという報告がある。関係性の要因に加えて個人特性も考慮することで、2種の恋人支配行動の生起メカニズムの違いをより明確に明らかにできよう。

先行研究より複数の個人特性との関連が示されているものの、これらの特性をもっているからといって必ずしも問題行動が生起するわけではないように思われる。赤澤他(2011)や上野他(2012)では、とりあげた個人特性と問題行動との関連は示されているものの、その影響力は決して大きいとはいえない可能性がある。恋愛は2者の相互作用によって成り立つ関係であることから、関係内で生じる問題行動は個人内の特性よりも関係性の構築に関する特性のほうがより影響力が強いと考えられる。すでに、愛着スタイルやラブスタイルと問題行動との関連が示されているが、本研究では関係内で生じる問題行動とより強く関連すると考えられる共依存傾向をとりあげる。

共依存とは元々はアルコール依存者とその家族との関係性を説明するための概念であり、問題を抱えた者と献身的に世話をを行う者との間で構築される関係をさす。斎藤(2003)によると、問題を抱えた者の背景には世話をする者から見捨てられたくないという強い不安が、世話をを行う者は相手に依存してもらうことによって相手をコントロールしたいという強い支配欲求があるとされている。近年ではアルコール依存者に限らず、看護師と患者の関係や

(森・長田, 2007), 主介護者と被介護高齢者の関係(難波・北山, 2007)のように, 緊密な関わりが生じる関係性について検討がなされている。強い共依存傾向は親密な対人関係の中で, 様々な問題を抱えやすいことが指摘されており(前田・長友・田中・三浦, 2007; 緒方, 2005), 例えば難波・北山(2006)では, 被介護高齢者への虐待の背景に主介護者との共依存関係があることを指摘している。

恋愛関係における問題行動と共依存傾向との関連を扱った研究はあまり多くはないものの, 強い共依存傾向は関係における問題行動の生起と関連していることが報告されている(野口, 2009)。共依存傾向を持つ者は他者との関係性の境界線が曖昧になりがちであるという特徴があり(西尾, 2000), 恋愛という関係においては親密であるがためにいきすぎた干渉や様々な暴力行動へとつながってしまうことが予想される。問題行動と関連する対人関係の要因の1つとして共依存をとりあげることで, 恋人支配行動の生起メカニズムの違いをより実態に即した形で明らかにすることができると考えられる。具体的には, 献身することで相手に必要とされる依存特性と相手に頼るという依存特性がどの恋人支配行動と関連しているかを検討することで, 2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違いを明らかにする。

共依存傾向と問題行動との関連を示した野口(2009)では, 共依存傾向を単独の因子で測定しており, 本来ならば世話をする側とされる側の補完しあう2つの特性の組み合わせである共依存関係を弁別して取り出しているとは言い難い。この測定上の問題を解決するために, 本研究では共依存の測定に前田他(2007)の開発した共依存行動尺度を用いることとする。この尺度は自己犠牲因子と未熟性因子の2つの補完しあう因子から構成されており, 自己犠牲因子は世話をを行う側を, 未熟性因子は世話をされる側の特徴と対応していると考えられる。この尺度を用いることで, どちらの特性が恋人支配行動と関連するのかを明らかにすることができるだろう。

本調査は本来ならば対象者の確保に困難を伴うものの, カップル単位で行うことが望ましい。なぜならば, 実際に共依存にある恋愛関係をとりだして検討することが可能となるからである。対して, 個人を対象とした調査は簡便であるものの, あくまで共依存的な特性を持つ者の行動傾向を把握することに

とどまり, 実際に共依存関係にある組み合わせをとりだして検討しているわけではないことから解釈に一定の留意が必要となる。将来的にはカップル調査が必要であるものの, 本研究はその前段階として個人の共依存特性と問題行動との関連についての知見を収集するための調査と位置づけて検討を行うこととした。そのため, 本研究は2者の相互作用からなる共依存関係ではなく, 個人の共依存特性と問題行動との関連について限定して議論を行う。

本研究の目的と仮説

本研究は, 個人特性として共依存傾向を, 関係性の状態として恋人分離不安をとりあげて検討を行うことで, 2つの支配行動の生起メカニズムの違いの解明を試み, 予防や教育に寄与する知見を得ることを目的とする。

ところで, 問題行動は関係に悪影響を及ぼす可能性が高いものの, 関係維持という観点からは必ずしもそうとはいきれない側面もある。束縛的な行動は他の社会的な関係との交流を制限することになる。そのため, 恋人が他の異性と親密な関係を構築することを阻害することになる。また, 暴力的な行動の被害者は再び暴力が生じることを避けるために加害者の気分を害さないように服従することが予想される。結果的には, 暴力行動も他の異性との交流を阻止することになるだろう。このように, 少なくとも問題行動の当事者にとっては2つの支配行動は関係維持に有効と認識されているからこそ選択されていると考える。この2つの違いは, 関係破綻のリスクの大きさにあるといえる。本研究では, 束縛は関係破綻のリスクが小さく, 暴力は相手に苦痛を与えるために相手の愛情を失う可能性が高く, 関係が崩壊するリスクが大きい行動ととらえることとする。このことをふまえたうえで, 本研究は以下の2つの仮説をたてて検討を行う。

共依存関係の中で世話をを行う側は自分が必要とされることが心の支えとなり, その意味で相手に依存しているといえる。相手が自分を必要としなくなることへの恐れが強いと考えられることから, 強い自己犠牲特性を持つ者は恋人への分離不安が高まった時に相手を支配しようとして束縛行動をとることが予想される。ただし, 関係破綻を回避するためにリスクの大きな暴力行動には至らないだろう(仮説1)。

世話を受ける側は、相手から世話をしてもらうことで自分が重要な価値ある存在であると確認していると考えられるため、世話をする側とは別な形でやはり相手に依存しているといえる。世話を受ける側にとっても相手との関係が崩壊することは自分に献身してくれる他者を失うことになるため、こちらも支配的な行動をとることが予測される。ただし、共依存の未熟性特性は「ものごとを忍耐強く待つことが苦手である」や「過去の人間関係の失敗から学ぶことが少なく、同じことを繰り返すことが多い」といった項目から測定されることからわかるように、世話を受ける側は相手を失いたくないという自分の欲求を最優先にし、手段を選ばず相手が去っていかないようにする可能性が高いと考えられる。そのため、強い未熟性特性を持つ者は分離不安とは関係なく束縛と暴力のどちらの支配行動もとる傾向にあるだろう（仮説2）。

以上をふまえて本研究では、共依存傾向と恋人支配行動に関する2つの仮説について検討を行う。これらの検討を行うことで、2つの恋人支配行動の違いについて示唆的な知見を得ることが目的である。

方 法

調査時期 2014年4月から5月にかけて質問紙調査を行った。

調査対象者 A大学の学生を対象に調査を行い、282名から回答を得た。分析には恋人がいる者で欠損値のない者のうち、恋人支配行動尺度の全項目に最低点をつけた9名を除いた48名（男性19名、女性29名；平均年齢19.27歳，SD=1.55）を対象とした。恋人支配行動尺度の全項目に最低点をつけた者、すなわち支配行動が全く生じていない者を除外する手続きを行った理由は、本研究があくまでも恋人支配行動の生起メカニズムに焦点をあてたものであり、一般青年の支配行動の実態に着目したのではないためである。また、片岡・園田(2014)では恋人支配行動の生起には交際期間が影響していることが示されているため、彼らの分類に従い2年を基準として交際期間による分類を行ったところ、分析に耐えうる人数とならなかったため、交際期間による分析は行わなかった¹⁾。

質問紙

基本的属性 年齢、性別、恋人の有無、交際期間

について回答してもらった。

恋人支配行動 片岡・園田(2014)が開発した恋人支配行動尺度を用いた。暴力的支配行動と束縛的支配行動の2因子各5項目からなる。それぞれの行動を恋人に対して行っているかどうかについて、あてはまる程度を答えてもらった。

恋人分離不安 片岡・園田(2014)が開発した1因子10項目からなる恋人分離不安尺度を用いた。

共依存傾向 前田他(2007)が開発した対人関係における共依存を測定する尺度を用いた。この尺度は、自己犠牲因子7項目と未熟性因子6項目の2因子から構成される。

先行研究に従い、恋人支配行動尺度と恋人分離不安尺度は7件法（1～7点満点）、共依存尺度は5件法（1～5点満点）を用いた。

手続きと倫理的配慮

調査は授業時間を用いて集団的に実施した。その際に、回答は拒否しても構わないことや、回答途中であっても中断することができること、回答を拒否したり中断しても不利益が生じないことといった倫理的な配慮について調査用紙の表紙に明記し、また口頭でも説明を行った。

結 果

各下位尺度の基礎統計量

はじめに、各下位尺度の基礎統計量を男女ごとに算出した(Table 1)。束縛的支配行動得点にフロア効

¹⁾ 現在恋人がいる者を分析対象としていることから、データ数があまり多くはない。本研究ではブートストラップ法を用いた媒介分析を行うことにより、少数データによる問題をクリアできると考える。ただし、可能な限りサンプルサイズは大きい方が推定精度が高まるため、交際期間が長期の者は除外せずに分析を行う。

なお、交際期間が2年未満の者を短期群（40人）、2年以上の者を長期群（8人）として、2つの恋人支配行動に差異があるかを検討した。F検定よりどちらの支配行動得点も有意差がみられたことから Welch の *t* 検定を行ったところ、どちらの支配行動にも有意差はみられなかった（暴力的支配行動得点： $F(39, 7)=0.291, p<.01; t(8)=0.965, n.s., d=.56$ ）、束縛的支配行動得点： $F(39, 7)=0.332, p<.05; t(8)=0.997, n.s., d=.55$ ）。そのため、交際期間の弁別をせずに分析しても問題ないと判断した。ただし、2つの *t* 検定のどちらも中程度の効果量がみられたことから、結果の一般化には一定の留意が必要である。

Table 1 各尺度の平均値と標準偏差

		交際期間 (月)	恋人分離不安	共依存		恋人支配行動	
				自己犠牲	未熟性	暴力的支配行動	束縛的支配行動
男性群	<i>M</i>	10.605	4.711	3.662	2.482	2.211	1.463
(<i>n</i> =19)	<i>S.D</i>	8.308	1.220	0.696	0.747	0.578	0.551
女性群	<i>M</i>	15.310	4.548	3.645	2.615	2.324	1.862
(<i>n</i> =29)	<i>S.D</i>	16.167	1.241	0.625	0.857	0.916	0.980
全体	<i>M</i>	13.448	4.613	3.652	2.563	2.279	1.704
(<i>n</i> =48)	<i>S.D</i>	13.803	1.235	0.654	0.818	0.802	0.859

Table 2 共依存の4タイプによる恋人支配行動の平均値と標準偏差

		共依存		恋人支配行動	
		自己犠牲	未熟性	暴力的支配行動	束縛的支配行動
非依存群	<i>M</i>	3.084	1.912	2.141	1.282
(<i>n</i> =17)	<i>S.D</i>	0.433	0.424	0.512	0.490
自己犠牲群	<i>M</i>	4.208	2.212	2.109	1.673
(<i>n</i> =11)	<i>S.D</i>	0.341	0.334	1.066	0.622
未熟性群	<i>M</i>	3.371	3.150	2.320	2.120
(<i>n</i> =10)	<i>S.D</i>	0.131	0.508	0.722	0.964
両特性群	<i>M</i>	4.286	3.467	2.660	2.040
(<i>n</i> =10)	<i>S.D</i>	0.469	0.710	0.810	1.091
	<i>F</i>			$F(3, 44)=1.08, n.s.$ $\eta^2=.074$	$F(3, 44)=2.93, p<.05$ $\eta^2=.200$

果が疑われるものの、極端な逸脱ではないとみなして分析を続けることとした。束縛的支配行動には性差がみられるという報告(片岡・園田, 2014)があることから、2つの支配行動に性差がみられるかを検討した。それぞれの支配行動得点について *F* 検定を行い、どちらも有意差がみられたことから Welch の *t* 検定を行ったところ、暴力的支配行動には有意差はみられず、束縛的支配行動には有意傾向がみられ、男性にくらべて女性の方が高かった(暴力的支配行動得点: $F(18, 28)=0.406, p<.05; t(46)=1.679, n.s., d=.14$, 束縛的支配行動得点: $F(18, 28)=0.320, p<.01; t(45)=1.764, p<.10, d=.47$)。有意傾向ではあったものの、有意差はみられなかったため、以後の分析では男女を込みにした分析を行うこととした。

共依存タイプによる支配行動の差異

共依存尺度が2因子から構成されているため、組み合わせ上4つのタイプが存在することになる。そこで、共依存と恋人分離不安の分析の前に、まず共依存の4タイプにより2つの支配行動に差異があるかを検討する。一般的には、共依存はどちらかの特

性を持つ者を中心に議論がなされる。この分析を行うことにより、2つの組み合わせが問題行動に影響しているかどうかを確認する。

各因子の全体の平均値を基準として群わけを行い、“非依存群”(自己犠牲低、未熟性低)、“自己犠牲群”(自己犠牲高、未熟性低)、“未熟性群”(自己犠牲低、未熟性高)、“両特性群”(自己犠牲高、未熟性高)に分類した(Table 2)。群間に恋人支配行動の差異がみられるかについて1要因参加者間分散分析を用いて検討した。その結果、束縛的支配行動に有意な主効果と大きな効果量がみられた。Tukey の HSD 法を用いた多重比較を行ったところ、どの組み合わせにおいても有意差はみられなかった。また、暴力的支配行動得点は群間で有意な主効果はみられなかったものの、中程度の効果量がみられた。

共依存、恋人分離不安、恋人支配行動の媒介分析

はじめに、恋人支配行動の暴力的支配行動因子を目的変数、共依存の自己犠牲因子を予測変数、恋人分離不安を媒介変数とした媒介分析を行った(Figure 1)。その結果、恋人分離不安を媒介した効果はみられず、また、自己犠牲因子から暴力的支配行動

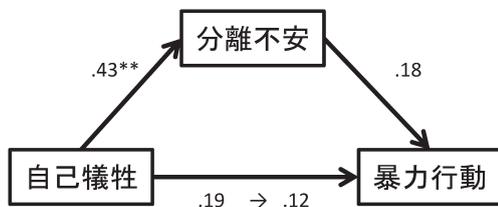


Figure 1 自己犠牲, 恋人分離不安, 暴力的支配行動の媒介分析
** $p < .01$

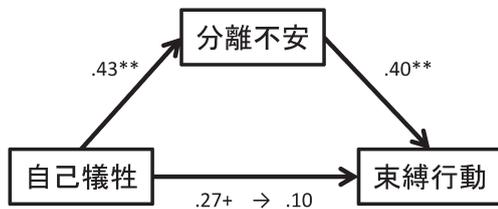


Figure 2 自己犠牲, 恋人分離不安, 束縛的支配行動の媒介分析
** $p < .01$, † $p < .10$ (ブートストラップ信頼区間 0.006 (99% 下限), 0.639 (99% 上限))

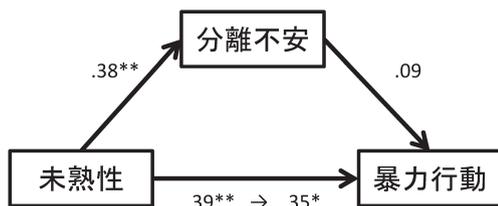


Figure 3 未熟性, 恋人分離不安, 暴力的支配行動の媒介分析
** $p < .01$, * $p < .05$

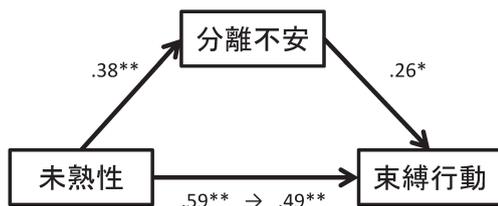


Figure 4 未熟性, 恋人分離不安, 束縛的支配行動の媒介分析
** $p < .01$, * $p < .05$ (ブートストラップ信頼区間 0.015 (95% 下限), 0.243 (95% 上限))

への直接効果もみられなかった。暴力的支配行動を束縛的支配行動にかえて同様の分析を行ったところ (Figure 2), 恋人分離不安を媒介した効果がみられた。以上より, 仮説1 (強い自己犠牲特性を持つ者

は分離不安が高まった時に相手を支配しようとして束縛行動をとる。関係破綻を回避するために暴力行動には至らない) は支持された。

次に, 恋人支配行動の暴力的支配行動因子を目的変数, 共依存の未熟性因子を予測変数, 恋人分離不安を媒介変数とした媒介分析を行った (Figure 3)。その結果, 恋人分離不安を媒介した効果はみられなかったものの, 未熟性因子から暴力的支配行動への直接効果がみられた。暴力的支配行動の束縛的支配行動にかえて同様の分析を行ったところ (Figure 4), 恋人分離不安を媒介した効果がみられ, 未熟性因子から束縛的支配行動への直接効果もみられた。以上より, 仮説2 (強い未熟性特性を持つ者は分離不安とは関係なくどちらの支配行動もとる) は部分的に支持された²⁾。

考 察

本研究は恋愛関係の中で生じる2種の恋人支配行動である暴力的支配行動と束縛的支配行動の生起メカニズムの違いの解明を目指し, 個人特性と関係性の状態から検討を行った。個人特性として共依存を, 関係性の要因として恋人分離不安をとりあげて検討した。まず, 共依存と問題行動との関連について検討を行った。群間に違いがみられなかったものの, 効果量がみられたことから, 分析人数が少なかつた可能性がある。この点については, 人数を増やして再度検討する必要がある。

その後, 本研究のメインテーマである2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違いについて検討を行った。分析の結果, 共依存の自己犠牲特性は恋人分離不安を媒介して束縛的支配行動が生じ, 暴力的支配行動は生じないという仮説1は支持された。強い自己犠牲特性を持つ者は関係性への不安が強まることで, 支配的な行動を選択する傾向にあることが示された。さらに, 相手を失わないための行動の1つとして暴力行動ではなく, 関係破綻のリスクが少ない束縛行動を選択していると考えられる。

また, 強い未熟性特性を持つ者は分離不安とは関係なくどちらの支配行動もとるという仮説2は, 部分的に支持された。これは強い未熟性特性を持つ者

²⁾ なお, 確認のため共依存の交互作用項を投入した媒介分析の結果も, 未熟性得点を投入した場合と同じ傾向のモデルとなった。

は、例え破綻のリスクが大きくても、関係性の状態に関わらずに暴力行動を選択してしまう傾向にあることを示唆するものであろう。共依存関係の中で、暴力行動は強い未熟性特性を持つ者がとりうることを示した点は意義あるものといえる。また、束縛的支配行動には未熟性特性からの影響に加えて、未熟性特性から分離不安を介して束縛的支配行動が生起するという影響がみられた。これは、強い自己犠牲特性を持つ者は関係性の状態がトリガーとなっているのに対して、強い未熟性特性を持つ者は関係性の状態から束縛が生じる場合と、関係性の状態にかかわらずどのような恋人に対しても束縛をしてしまうという2つの束縛方略がある可能性が示唆される。

恋愛関係の中で生じる問題行動と共依存との関連は指摘されてきたものの(野口, 2009)、共依存のどちらの特性がどのような問題行動をとる傾向にあるかは定かではなかったことから、本研究の結果より共依存と問題行動との関連について貢献できたといえよう。さらに、本研究で得た結果の中で、強い未熟性特性を持つ者は束縛と暴力のどちらも選択しやすいということに注目したい。この群は、束縛から暴力へと問題行動がエスカレートしていく可能性があるかもしれない。束縛から暴力へと問題行動の強さが上昇していくことについては、本研究は横断調査のためこれ以上の分析と考察は難しいものの、今後検討していきたい。

本研究より、2つの支配行動の違いは以下に集約できる。共依存の自己犠牲特性が強い者は、関係性において分離不安が高まったときに束縛的支配行動を選択する傾向にある。しかし、この群は暴力的支配行動を行うには至らないといえる。共依存の未熟性特性が強い者は、関係性における不安とは無関係に束縛的支配行動も暴力的支配行動も選択する傾向にある。このように、共依存傾向と恋人分離不安という観点から、2つの恋人支配行動のメカニズムの違いの解明に貢献する知見を得ることができたといえる。

本研究知見の予防や教育への応用

恋愛関係の中で、恋人への身体的・性的な暴力が問題行動であるという認識は若年層で8割弱(横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)であり、デートDVの領域の中で最もしてはならないものとして認識されている。それにも関わらず、恋人

への暴力行動を選択してしまう者は、親密な関係性の継続に関してなんらかの困難を抱えていることは想像にかたくない。関係性の状態に関わらず暴力的支配行動が生じるという本研究の結果は、暴力的な行動を選択してしまう者はどのような恋人と交際していても暴力行動をとってしまう可能性を示唆している。そのため、暴力は一般的な青年がとる行動というよりは臨床群に分類される者がとりうる方略といえるかもしれない。カウンセラーなど、臨床現場で活動する専門家の対処が必要となろう。

また、束縛的支配行動はどちらの共依存特性を持つ者にも生じやすいという本研究の結果は、恋愛関係の中では暴力行動に比べて束縛的な行動が生じやすいことを意味している。これは、束縛的な行動に該当する項目群の行為経験率が暴力行動に比べて高いことと合致する(京都市男女共同参画推進協会, 2012)。多くの恋愛関係の中で起こる問題であるにもかかわらず、束縛が問題行動であるという認識は他の領域に比べて約3割と最も低いことから(横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)、教育現場など広く多くの若者を対象とした取り組みが必要といえる。

具体的な介入方法については今後の検討が必要であるものの、本研究より共依存的な関係の中で暴力的な行動は世話をうける側が、束縛的な行動は世話をうける側にも、行う側にも生じることが示唆される。また、それぞれの生起メカニズムについても異なるという結果をえた。このように、問題行動の種類や生起メカニズムに応じた予防や教育が必要であるという示唆的な知見をえることができたといえよう。

今後の課題とまとめ

本研究の課題は分析対象者が多くなかったため、交際期間を統制した分析を行っていない点である。暴力行動や束縛行動は関係の長期化に伴い生じるという報告があることから(片岡・園田, 2014; 高坂, 2012; 松井, 1993)、本研究で想定したモデルが交際期間によって異なるかどうかは改めて検討する必要があるだろう。この点については、データ数を増やした後に再度検討を行っていきたい。加えて、共依存関係は2者の特性の組み合わせによって生じると考えられることから、本研究で得た知見はカップル調査によって再現されるかどうかについても検討す

る必要がある。

これらの課題を残すものの、本研究より暴力行動の生起には共依存の未熟性特性が強く影響を及ぼしているのに対して、束縛行動の生起には2つの共依存特性と恋人分離不安が関与していることが明らかとなった。以上のことより、2つの支配行動は異なるメカニズムによって生じることが示された。今後は、得られた知見の頑健さや他の個人特性や関係性の変数を検討していくことで、さらなるメカニズムの精緻化を行っていく必要があるだろう。

引用文献

- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 2011 衡平性の認知とデートDVとの関連 仁愛大学研究紀要人間学部篇, **10**, 11-23.
- Archer, J. 2000 Sex differences in aggression between heterosexual partners: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **126**, 651-680.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss*: Vol. 1. Attachment. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか(訳) 1976 母子関係の理論1: 愛着行動岩崎学術出版社.)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger New York: Basic Books. (黒田実郎ほか(訳) 1977 母子関係の理論2: 分離不安 岩崎学術出版社.)
- 深澤優子・西田公招・浦 光博 2003 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討 対人社会心理学研究, **3**, 85-91.
- Hazan, C., & Zeifman, D. 1994 Sex and the psychological tether. In Bartholomew, K. & Perlman, D. (Eds.), *Advances in Personal Relationships*, **5**, London: Jessica Kingsley, pp. 151-178.
- 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子 2012 大学生におけるデートDV加害及び被害経験と愛着との関係 学校危機とメンタルケア, **4**, 49-64.
- 片岡 祥・園田直子 2014 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **23**, 13-28.
- 京都市男女共同参画推進協会 2012 デートDVに関する実態調査
- 高坂康雅 2012 大学生の恋愛行動経験率の推移 日本心理学会第70回大会論文集, **163**.
- Lewis, S., & Fremouw, W. 2001 Dating violence: A critical review of the literature. *Clinical Psychology Review*, **21**, 105-127.
- 前田直樹・長友真実・田中陽子・三浦宏子 2007 福祉系大学生における共依存と心理的健康 九州保健福祉大学研究紀要, **8**, 79-87.
- 松井 豊 1993 恋心の科学 サイエンス社.
- 松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子 2012 デートDVの実態と心理的要因～自己愛との関連を中心に～ 女性学評論, **26**, 43-65.
- 森 秀美・長田久雄 2007 看護師―患者関係における共依存傾向とその影響についての検討 健康心理学研究, **20**, 61-68.
- 内閣府 2012 男女間における暴力に関する調査
- 難波貴代・北山秋雄 2006 共依存関係にもとづく高齢者虐待への看護介入 日本保健福祉学会誌, **12**, 25-32.
- 難波貴代・北山秋雄 2007 共依存関係にある主介護者と被介護高齢者間の高齢者虐待に対する看護介入 アディクション看護, **4**, 1-10.
- 西尾和美 2000 コ・ディペンデンス(共依存症)からの回復 ヘルスワーク協会
- 野口康彦 2009 大学生カップル間におけるデートDVと共依存に関する一検討 山梨英和大学紀要, **8**, 105-113.
- 緒方 明 2005 アダルトチルドレンと共依存 誠信書房.
- 斎藤 学 2003 家族依存症 新潮文庫.
- 榎原佐和子 2011 大学生のデートバイオレンス(交際関係における暴力)被害経験と暴力受容態度・性別役割態度・精神的健康との関連 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, **16**, 49-64.
- 相馬敏彦・福島 治・坂口菊恵 2006 親密な関係において暴力をふるう男女の愛着モデル 日本心理学会第70回大会論文集, 263.
- Sternberg, R. J. 1986 A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 119-135.
- Straus, M. A. 2008. Dominance and symmetry in partner violence by male and female university students in 32 nations. *Children and youth services review*, **30**, 252-275.
- 寺島 瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ 2013 大学生におけるデートDVの実態の把握―被害者の対処および別れない理由の検討― 筑波大学心理学研究, **45**, 113-120.
- 上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子 2012 大学生の性に対する態度がデートDVに及ぼす影響 四天王寺大学紀要, **53**, 111-122.
- 横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課 2008 デートDVに関する意識・実態調査報告書

(受稿: 2015.5.25; 受理: 2015.12.8)